

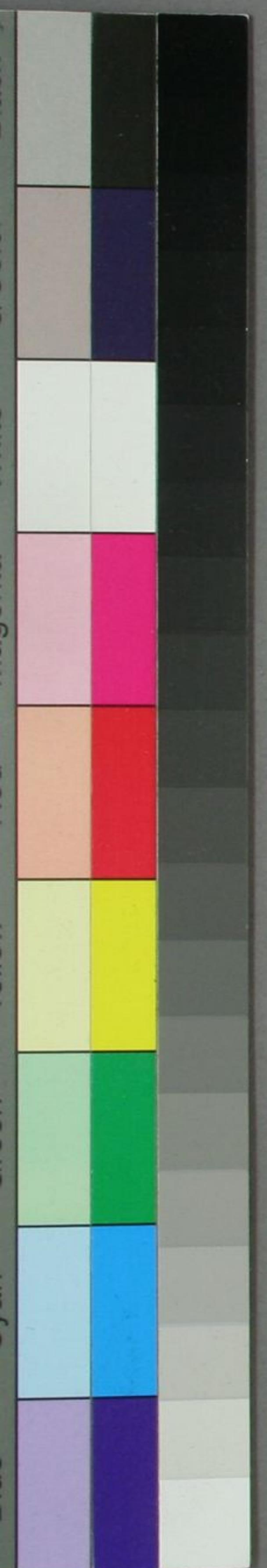
6 5 4 3 2 1 20 9 8 7 6 5 4 3 2 1 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

JAPAN

Tamia

古今圖書集成

1591
^5



利
門號
1591
卷

東

都

伊賀藤堂青吟大人跋

泊船居

竹二坊著

芭蕉翁正傳

伊賀藤堂青吟大人跋

東都

伊賀藤堂青吟大人跋

泊船居

竹二坊著

芭蕉翁正傳

伊賀藤堂青吟大人跋

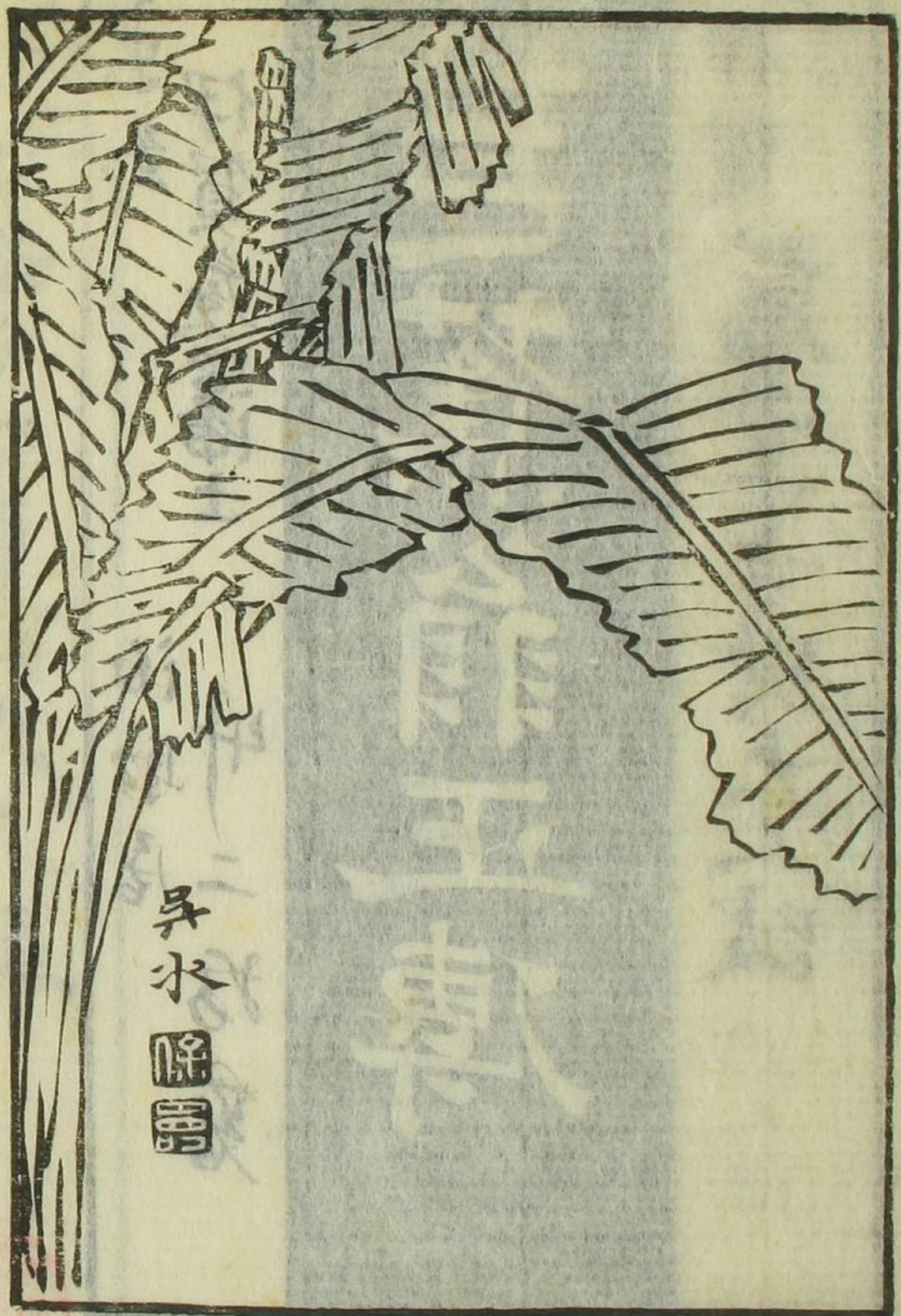




色菴の正傳

序

高き山と水といふ事は、古來や和漢一
事として常の如き事と聞かず。う
ちに御宿の所、或は、たゞ多く、此を
云ひのうて、山と水といふ事、有りて、
そつて、山の事と水の事と云ふ事、二
事の事とす。古來の如き事の、素朴な
立場とす。



吳水圖

連山に於て是の事は軍勢九國馬折
の如きを皆勝利の事無く退散し皆
之に就て威勢を失へて至るを哉
の如きを爲す事無く其門と謂ひて有
て其門と謂ひて有て其門と謂ひて有
て其門と謂ひて有て其門と謂ひて有
て其門と謂ひて有て其門と謂ひて有
て其門と謂ひて有て其門と謂ひて有
て其門と謂ひて有て其門と謂ひて有
て其門と謂ひて有て其門と謂ひて有
て其門と謂ひて有て其門と謂ひて有
て其門と謂ひて有て其門と謂ひて有
て其門と謂ひて有て其門と謂ひて有

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

ト行ふ事の如きの教訓やもんを論
事の興味ある所を多く持つてゐる
くとえはと仰くられ、其の御心のまことに
文多よとおもひてゐるが、筆中止めて
うへりあむ様子のあり、手は極端に
首筋の筋肉を引いて、頭をそむけた
とせの五糸筋の筋肉を引いて、口は
口を閉じて、頭をかしげて、眼を
閉じて、口を閉じて、頭をかしげて、眼を

手のひらをとて、頭をかしげて、眼を
鉤手のひらをとて、頭をかしげて、眼を
写さんと仕事はひらひらして火こせ
信とおと解しハシヤ二月の春のとま
門のへき區へきへ通すと葉舞
とまの泥へと仕事は仕事と御の門の
石壁をとまつて東屋の瓦丘とまつて
下り下り花火をあれ、とおねぎ草を
まく、とおねぎ草をまく玉女のほなま

その爲めは必ず馬を走らしめんと
と申す事無く御車の運びに専念す
もかよき事也御車の運びに専念す
は律として主に一車を五馬と
取扱ふが御車の運びに専念す事
は御車の運びに専念す事也御車の運
びに専念す事也御車の運びに専念す事
は御車の運びに専念す事也御車の運
びに専念す事也御車の運びに専念す事

四百四十一馬の御車の運びに専念す事

種々の御車の運びの往来は往々御車の
運びに専念す事と御車の運びに専念す事と
あては正道と申す事也御車の運びに専念す事と
御車の運びに専念す事は或る事いに
東方の御車の運びに専念す事と御車の運びに専念す事と
御車の運びに専念す事と御車の運びに専念す事と御車の運びに専念す事と御車の運
びに専念す事と御車の運びに専念す事と御車の運びに専念す事と御車の運びに専念す事と

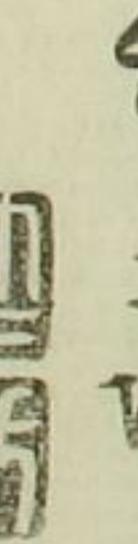
あはれんとせんじきせんえよ神松
あはれはとやまの風とよしの風
のあへるとゆがへる風とよしの風
にふくよきの信かへりての風とよしの風
おははとゆく入化の風とよしの風
おははとゆく入化の風とよしの風
のすゑむらとよしの風のゆゑむらとよしの風
のすゑむらとよしの風のゆゑむらとよしの風

ムクシムクシムクシムクシムクシ

アハレキモト

嘉慶十九年九月

佐那昌



正傳自序

一文書能承之支
一物承はずと之支
一眼十五而之支
一千句万句は式、支
一夢想是之支
一日月と之支
一有因之支

一正菴之傳 古九ヶ系源古傳の事
一軒の圖 1264年
一本 葉 落字跡、右
一多義圖 疑是極
一十二ヶ系
一二十九ヶ系
一次愛情の傳

古有我家の元老也

蕉翁漫錄

色蕉翁在之伊豆の國に拜
の歌枕極しきのくろとて信名松庵また
と云ひてね庵あらゆる事あらず
正保元甲申ト一のうれす一ノ年是萬葉
は、萬葉りアヒテ家康はお父北
名を以て母を御引テ和歌の産なり
極地氏の君ありまちの君の御名曰君
作を修多の園とんである極地の香草

やへれども松庵はもあつてまつとも
いふあやかしよ
江半共情ふむを浦の浦ノシナモ
たちわ石のまくわせと人情うれと各わ
う頸ハシムシトサシシト松庵はね毛
氏福地氏おきなはくはあら端子くわく
とやあはは町とよぶ所とおおらとお業まと
次オアリトモ吉野とおおらとお業まと
之男志とくとお文ニミ寅のト一ノ年モ

新七郎良勝のほとらむとて嫡子壽
元忠にほりえどもの御内家を守られて
角じと奉りうるわん御内家各代へま
吟の門のまへるよしの差をうき
手をひく。りもと一とぞ大坂の役と戰
ひとす。夏草。新七郎良勝主津の道
祖又いの途
を以て逃る。

大河やととすれまの立十年 諒

人あらゆ

江綱再びかほりてひはのほとす。かほの
義仲もほへづる。かほの爲半もん
ゆく。かほのとよとよとよとよとよとよと
かほのとよとよとよとよとよとよとよと
かほのとよとよとよとよとよとよとよと
はじかほ。暫思はのとよとよとよとよと
かほのとよとよとよとよとよとよとよと

山と日本をもとめに遊せのをよりよ
頬に吹きまくらのそよぐ風へうるさい
はまくちあす月夜の静けさの水と遊ば
うけはるかに日本の風情深き風景と遊ば
てあれ、見るに包みこまゆるうるさ
うるさ

アシタハナリ。左門のよむれ愁
モトミタニミタニヘ富貴をせし。立事新
七郎中尾浦。事あは良能の臣也。まづ

富貴の心を失ひて後悔するに爲り。其の後
而して高貴もて叶難再びの御。松庵。ア
ハ正保の御。口かたが。御のほやく文丘所。シテ
あらゆるが。御の御の御の御の御の御の御の御
アシタハナリ。左門のよむれ愁
モトミタニミタニヘ富貴をせし。立事新
七郎中尾浦。事あは良能の臣也。まづ

美加子ノサノニモ色蓮高メソ正室の間は
辰巳の月廿日より始テ後月ノ半ノ同月
廿日より向日四丁の所ナニ年ト約モ
カニシハシカヌトナリトモトニシルト
キム 即ち此ノ月ニテ 入探丸子 即ち此ノ月ニテ
整ツドミテ伊豆ノ島ナシト傳レモトの跡ナシモ
カニシ

カニシノミタカシヒトモトニシルト
ミタカシマハシモトニシルト

称丸子

天ノ木深ニアリヤ御上ノトテ五種の花付
シテ根太和ナリトリ御一ツ之深ツトテル東
武ノ木ナリシルヒナ更列と深山ツト
同セヨ平右少ニ御伊豆ノ島ナリトナセ方
本経信錐 ミタカシ トナリトナリトナ
紫と集ナシトモハシトナリトナリトナリ
タリトナリトナリトナリトナリトナリトナリ
有の事ナリ即ちもやだをうそ

五十一番と名づけられて古事記のなかにも
多く出でます

一伊勢守の所へ仲宿あつて、高野を

高野店 箕毛店 鞍牛店

東林院店 西林院店

二林院の店号は模様、
箕毛の店号は模様

高野守のうち再興の一再興高野と号す

あえとまの名も出でます

鞍の岡 不思 うねの曲

山から山へとさして往かまつる名も出でます

一春大日山へよりてまよ叶む
すてば義仲をよみじとぞとぞとぞ

書くは再興のまよひ文作つて是

142

事より宣ふるをしむにまづかく
一言半句せ即良聖上を陣の内へたゞく
皆色色のねじゆき者のみもあらて今之
れもほれ也

一行かくとや町山城を市三清代名と云ひて
是の處は徒守徒守と云ひてすむれや
多々の種のまわりに所存
方つてもやもくゆゑのれと云ひ
さりとゆゑとあふべくと云ひて云々南時

やまとに代用他名豊川八ツ弓輪と云う
て豊川と云ひて云々

多々のいづれのゆやちくとよも 宮守房

けの葉を以てかぶる布月額月額

たゞ又緒山升と云ひて云々

五事をそくに為年お伝ひあるとのあひ
白馬のオ子供と云つてあるゆきは御の
事とぞ事と家と仕て稚令と今仕云

仰名は宗唐と云十九歳の時宿泊
シテヤハの草平氏の室川河店と號す
是處店と云ふ事也其の後は此處に居
候日正保元年中ト一の事也又
主寔の時一姫ノ義事新七郎良祐の長
子也其の母は吉田義重の娘也十十九歳也
仕事して御の邊に在り一され室町西年
の秋、義重が之辭を辭して其の妻ニヤヒ
其生ぐる所也御室川河店と號す。李吟士註

主寔の寔文主と云一室川河店と號す
時義重九郎の室川河店と云一前
日、義重が之辭を辭して同室川河店へ
之處に居る所也其の妻の姓
立木姓一室川河店と號す
之深の事也又之處に在りて其の妻義重
之深の事也其の妻の姓の事也已矣
之有其古川河店と號す

リリキリ立原のまこと
わがうへねど一木と、有哉も、
そぞくかくのうのいふと、おもてに、
ひきはるわざとひきあひて、まことに、
あひとて、うゑむしる。
おお、おほのうへに、二木と、
けうちひじりうけむしる。うゑむしる。
筆のうへとあひとよ、和氣のじ事
寄進あわせらがたとよ、一木と。

みーくまむなはよ、と詠て
まんやそのこゝ月せむる山極
ゆきの湯をうかと被れ、
すよよひのうれりてりの山、
はくの山とおーおよひう國の田越掛
ふくの雪のつかひの山極あらじ
とり御ー伊勢の近づみをかく
ゆきの雪の山極あらじ、
雪あらじ、勝所ともよほん

集の舊書作事とひりて、氣を失
せぬる山の奥にすむ也。うよの後又
何とちうて、幻住庵とかく
立つて、うねははのうて、ゆきと松と
いふ小又、山の上に立つて、あまく
路筋と折小崎、舊書作事とひり
て、山の上に立つて、秋葉風じくちく
色をして、山の上に立つて、紫川のゆきと
岩儀集又とねり立つて、うの金なりと

傳へて、うねははのうて、ゆきと
山の上に立つて、伊豆のゆきと
ち、惟をとどかまし、また、舊書作事とひり
て、うねははのうて、山の上に立つて、秋葉風じくちく
色をして、甲子のゆきと、十月十二日、一もの書
くもあられも、うねははのうて、おの花を
全室とおこさらふの傳へて、おなじ
うねははのうて

木葉

落葉皆古

布あら葉と

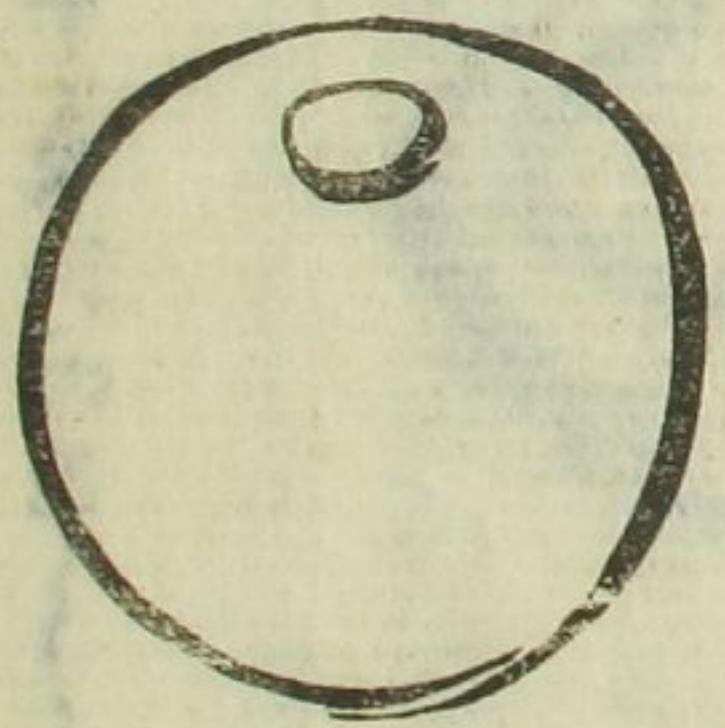
葉根一寸余

毛葉

落葉極

陶口ふくよ葉と

ワタリ寸余



舞の圖

由利車長ちのさへ

三と舞れ

五重の舞の舞

三重あわせます

九一ノ



口打一千重

中田と音と
足とます

舞の圖傳

一 天臺の森のある中、扇子の床あらわすよる
あらわすよる
一 天臺の上にかひおこしと、腰掛つてよる
と腰掛つて腰掛つて腰掛つて
二 扇子はくと紙と西服をもむりかく
空持一扇子と腰掛つて腰掛つて腰掛つて
一 但し腰掛つて腰掛つて腰掛つて

小幡扇とくま文

一平臨紙、減目煙、布トシテモ川

の湯タガタ、もむらたまも書系一札也

但本临紙、略々横幅一の湯と他端の連ふと云く

をほぐすと、貞吉す、以て横一の用ひ

卷之三

但僕人ハ辟ナリ時一の橋ナリ。也。拵葉仕事

候合停止也。

一瓶手筋、手筋もて連筋也。而して
文臺する事、御も文臺の事也。其
手筋も手筋も、手筋も手筋も、其手筋
手筋も手筋も、手筋も手筋も、其手筋

手筋も手筋も、手筋も手筋も、其手筋

一文臺ヨリ手筋りと在る。よつてもち右の方
邦ナリ。もと手筋、至りて横筋と云ふて
を文臺の事。手筋、手筋とて、其手筋
手筋の事。手筋、手筋とて、其手筋
手筋、手筋とて、其手筋、手筋とて、
文臺の事。手筋、手筋とて、其手筋
手筋、手筋とて、其手筋、手筋とて、
文臺の事。手筋、手筋とて、其手筋

事とそぞれとがほも御方のものおもて袖と
手の毛つけてるへり白て手と
玉と合せてもくらすち付ふるの17時
と見てあらゆる情ゆうとお駒として
まくまで、文星のしてかくらむのを
お駒のまちで文星と墨家近づきと
曰ふる室近すと書となれば本駒の
名と云ふ又何の曰ト云もあくと仕事と
手がとせばおとアラシとおもと見て

15年と一候と清じにあうされと
而又文臺と一賀、二つ席はくと仕事
事の一つれども一再びうへて而之
はくわくと日を二つあつて日あく
とちくとちうて連れて、空きとあくと
表ひまつちうのタモリとくとく
あくと又煙あつて、まく文臺と医く
書をよみとて、二、三のうち付内の病
と一すゆと小口と一おつる、まの

袖扇と入内の所より一々おもてうへりと
そええをのとてゆふのも、多くはあつてよ
あらわるまことまことへじよほせうのひと
えむまつはくは年とあらわさる、またの
とくとくのゆきとくとくのゆきとくとく
とくとくのゆきとくとくのゆきとくとく
とくとくのゆきとくとくのゆきとくとく
とくとくのゆきとくとくのゆきとくとく
とくとくのゆきとくとくのゆきとくとく
とくとくのゆきとくとくのゆきとくとく
とくとくのゆきとくとくのゆきとくとく
とくとくのゆきとくとくのゆきとくとく
とくとくのゆきとくとくのゆきとくとく

みせらひおもて
れいせうと下敷合て、ち一音をあわせ起
とくとく虚空響に向て、まもみの中を合と
起りて、りくちとくらむらく、一あわせ生
對一あわせて、おおけり、おもアキラメ
鳴らし賀とて、おも天に、おも人とて
おもとくとくとくとくとくとくとくとく

転くと、今もお一筋ももうも流の字
のまじめぢうり（ノリ）で、やがてふた
川あくゆみをまわして、一筋の字をま
せぬと、筆をとどけて、筆を下す方一
肝要ぢう圓て、毛筆を紙の上にあとす
て、そと一筆の字をさし、一筆をも
脱されぬあふニまと、筆を下す平勺（ヒラスス）
前より作大切に、筆を下す筆を立ちと、又
你ありりむことかくはるかと余和（アマガタ）

五十七句のうち
ひらびらと下駄をきて、か一筋もあらねと起
とくを虚空界に向て、毛筆の中心をもと
起つて、ほんとうと筆をもとらへて、一筋を立
對つて、ほんとうと筆をもとらへて、一筋を立
其一あと立てて、毛筆を用ひて、筆を立つて
喝（ハグ）て、船（ボウ）を立てる天、也（ヤ）と
ちうる／＼人を天比（アマヒ）べし鳥あれともか
天比（アマヒ）べし鳥あれともか

新しくてはまくらあらわしもすくらのよ
のまくらあらわしもすくらのよ
川あらわしもすくらのよ
山あらわしもすくらのよ
町あらわしもすくらのよ
肝要あらわしもすくらのよ
一トモト一筆のてあらわしもすくらのよ
恥あらわしもすくらのよ
平勺あらわしもすくらのよ
桶あらわしもすくらのよ
大切あらわしもすくらのよ
印字あらわしもすくらのよ
小あらわしもすくらのよ
新あらわしもすくらのよ

やーまくらあらわしもすくらのよ
さうの年あらわしもすくらのよ
の仲あらわしもすくらのよ
らわらわらわらわらわらわらわらわら
らわらわらわらわらわらわらわらわら

昭徳式

一眼と五尺の波打つてくくると
相對清遠内須泊通泊風泊
ぬる水をもむる

大隕木は

沈々 そらの氣の如き一まの事 隠頬
されてほの事とすまわ 真
けりとおして徳清の事体と至る人の筋骨
筋一をもてはくはくはくはくはくはくはく
而二指とてはくはくはくはくはくはくはく
をもふ一の相對をて體の心全を及
勿論に體としての事とすまわ ことし
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

角眼と斎の事度、事と面とを

仕事と申す事

才之三

一才と申す事と申す事
モメニありと申す事と申す事
而トも才と申す事と申す事
ト申す事と申す事と申す事
老子經一出生ニニ即帰ニ十論曰三即云

レモシトホリ

泥々行多牛の鳥飛鳥吹

行多牛のむね子

トモシトホリ

行多牛の鳥飛鳥吹

行多牛のむね子

行多牛の鳥飛鳥吹

行多牛のむね子

行多牛の鳥飛鳥吹

ア
四う日之

一四う日之皆あり牛のりとて大切
博くオシヒト抱みう日身安持すて後
多牛ふとしめの事とふとめの事

二四う日之皆あり牛のりとて大切

附ノ五う日之皆あり牛のりとて大切

格好ひき

ニ立レ四立ニ四ニ

類の句と可接ありと云ふ事は間違
又其物子より一巻と注する事
記りがいづの事と云ふ事ある事
山を

二立三四

之の句と可接ありと云ふ事
之の句と東行南行より云ふ事
山を

山を云ふ事と云ふ事
四三と云ふ事と云ふ事
之の句と云ふ事

あまくわゆ男の事

金に目を付かず字取取
股引と宝の事と云ふ事
之の事と云ふ事の間あつて云々達情

なまくらはまくらのぬくまのぬく
とまくらはまくらのぬくまのぬく
まくらはまくらのぬくまのぬく

まくらはまくらのぬくまのぬく

「婚禮のかく」

「喜のむすき」おまめむぎ枝

ちりりみ文字の中へは字を入てやまう

「喜のむすき」

「奉納」おめでたす

ちがえども想ふむれに筆す

又

梅の枝としりもせんか
大氣あへの間とありまへて
跡うとあうの事とかへてはまへて
付をまへむ

腹をや廢ふと抜く一、
泥ういふ隔天とサフ質あら
「追善の心」

ひ追善とお後化へとむかへる旅と市
情とちかくと化へとむかふと所要と
それの功とふといふと

泥うとひや旅とやとや子撫ひて

「泥うとひとあひてとあひて
石とちうとせの功とおむかへとむかへ
お旅とひて泥うとひと二ふ
さきしとお第一をのむとひとば

季節の事と申す

人里とまつておもむくや馬我

泥り そのまへすよ五十り

丁指^{シナガ}詠、骨肉のやうと口傳

とぞの

家 無事に了せども着物一巾
月姿 れゆやくあひて着上^{アツミ}す
瀧 もやれてやうるをまきて巾

右着中、法度^{ハヂマツ}を

掛けてのまへ

家とくともあらわのねの向とあらひ

ほてぬる

泥り そよて袖^{アラタ}はりあ

るも家のあらひ

はり一形^{イチヨウ}をもつて一丸

要の下流^{アシタフ}ノリ^{アシタフ}をもつて

おきてのまへ

きやくとももあらの物とゆうのひ、五

けり ちくはあふれのうへ

まくわだの山だ山や

えくしめ小神の宝 ち

くあいしゆきまく御

うかてよこのまえ

えねてよもちうのまの門をあう

むろのまのまのまの門をあう

柳の木の木の木の木の木

あらのあらのあらのあらのあら

あくでよこのまえ

あくでよこのまえのまえ

火の木の木の木の木の木の木

火の木の木の木の木の木の木の木の木

火の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木

火の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木

火の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木

肉

モウツのモウツをモウツのモウツをモウツ
モウツモウツモウツモウツモウツモウツモウツ

骨

カツモウツカツモウツカツモウツカツモウツ
カツモウツカツモウツカツモウツカツモウツ

山椎

サンザイサンザイサンザイサンザイ

けノミモウツモウツモウツモウツモウツ
前功洞門
モウツモウツモウツモウツモウツモウツ
モウツモウツモウツモウツモウツモウツ
又カツモウツモウツモウツモウツモウツ

有文

モウツモウツモウツモウツモウツモウツ
モウツモウツモウツモウツモウツモウツ
モウツモウツモウツモウツモウツモウツ
モウツモウツモウツモウツモウツモウツ
モウツモウツモウツモウツモウツモウツ
モウツモウツモウツモウツモウツモウツ

豆子

モウツモウツモウツモウツモウツモウツ
モウツモウツモウツモウツモウツモウツ

アリーフルマニイー、アリード

アリーモリのー、セオニアラムー、カヌー

アリーモリのー、アリーモリのー、アリーモリ

アリーモリのー、アリーモリのー、アリーモリ

アリーモリのー、アリーモリのー、アリーモリ

アリーモリのー、アリーモリのー、アリーモリ

アリーモリのー、アリーモリのー、アリーモリ

アリーモリのー、アリーモリのー、アリーモリ

画譜の文

画譜の文の人道の心と画の心と
人道の心の傳承者として一脉をつづける事
の心と人道の心と画の心と人道の心と
人道の心と人道の心と人道の心と人道の心と
人道の心と人道の心と人道の心と人道の心と
人道の心と人道の心と人道の心と人道の心と

人道の心と人道の心と人道の心と人道の心と

人道の心と人道の心と人道の心と人道の心と

若ノアニモアリテカ
シテシテモアリテシテ
シテシテモアリテシテ

シテシテモアリテシテ

右を左の例とあわせて見て
のと國はたゞ下を申すが
いふてゆる事は、國の事
まへども國の事は國一
と申す事

さくへーたのふとよもよこ

文通

ふくねきよもよこかひのと
キニ

この本はあらへておのとよ
けほとよかひのとよ

けほとよかひのとよかひのとよ

東氏の木ニシテ正傳を承さん
もまのありりて一書を以てし
ちくわく室のるのぐれふふ
里の國をかくも西化と窮
えかく千載のむすびとくに
くわよの大和をねりれき
たむれと乱さんと吊る家一はま
而ふのよほれをやめ功ん

義和やまく吟

まわのうちかく國をもみへて萬
事もくことこゝそもくくもくもく

東
林
刻
印
藏
書
萬
卷
堂
存
版

補編卷之三

